

今、振り返る教師としての原点

私を育てた
あの時代、あの出会い

「心に残る授業」のために 人間力を高め続ける

東京都・私立中央大学高校 仲森友英

学びにゴールはない、と人は言う。そうであるならば、学びの伴行者である教師にもまた、ゴールはないはずだ。哲学を語り、芸術を愛し、教養を深め、人間力を高めたいと渴望する仲森先生が、人間的魅力あふれる恩師との出会いを振り返る。

生徒を知的に刺激した



生徒の心に迫る授業がいかにも難しいか、教師として経験を積

んだ今だからこそよく分かります。この先、体力が衰える分、それを補う人間的な深み、教養がますます必要になってくると思うのですが、自分はあまり変わっていない気がします。新任の頃は、40代といえどもっと大人に思えたのですが……。

私が広島県立呉三津田高校の生徒だった頃の心に迫る授業とあって、真っ先に思い出されるのが、水野善親先生の現代社会、倫理の授業です。水野先生はいつも三つぞろいのスーツ姿で、

女子生徒がノートに先生のネクタイの柄を毎日書き留めるほどおしゃれでした。先生の口癖は「キザに生きたい」。しかし、「キザ」が意味するものは決して見た目ではありませんでした。

水野先生は、授業でよく生徒を刺激する発言をなさっていました。政治や個人の生き方について、「諸君はこう考えているかもしれないが、正反対の考えもある」とあえて異論を提示することも多く、「そんな考えをする人がいるなんて許せない」と怒りをあらわにする生徒もいました。一般論ばかりで授業を進めるのではなく、時にはわざと悪役を買って、生徒を知的に刺激するその姿は、今思えばまさに「キザ」そのものでした。

また、その時は意味が分からなくても、なぜか心に残る話もたくさん先生から伺いました。日本画をたしなんでいらつしやる先生が、「髪の毛の量感は、1本1本描き重ねることです生まれる」と話されたことがあります。随分後になって「きつと人の厚みは一朝一夕には出ないことを伝えたかったのだ」としみじみと気が付いたものです。

多くは授業中の雑談での話ですが、それらが先生の経験に裏付けられたもので、さらに授業の本質から外れていなかったからこそ、30年近く経つ今なお忘れず、一層心に響くのです。

教育実習で母校に戻った時には、鮮烈な出来事がありました。生徒の前で臆せず日本史の授業

が出来た私を、多くの先生が「実習生にしては上出来」と褒めてくださる中、水野先生はひと言、「さっきの授業は、きみが本当にやりたい授業なのか？」とおっしゃいました。まさにほっとする思いがしました。私の授業は、教科書を読めば分かることを軽妙に解説しただけで、生徒に何を伝え、何を考えてほしかったのか、授業の軸がなかったのです。「水野先生にもきつと褒めてもらえるはず」と、天狗になっていた自分が恥ずかしくて仕方ありませんでした。

教壇に立つようになってからも、私は折に触れて水野先生から教えをいただいています。新

心に残る授業を目指して

先輩教師の言葉

生徒を刺激する
豊かな教養が
教師には必要

広島県・私立安田女子中学・高校 校長
水野善親



全ての生徒は将来、社会に大きな貢献をする可能性を持つています。その可能性に敬意を表して、私は若い頃から、襟を正して教壇に立つことを旨としてきました。

しかし、授業では生徒の視野を広げるため、生徒を挑発するような話もしました。現代社会では、授業内容への批判をノートに書くことを義務付けましたが、「先生の発言は納得できない」と書かれたことが何度もあります。しかし、知的衝突を恐れ、要領よく授業を進めるだけでは、生徒の中にその教師との出会いは価値あるものとして残りません。教育実習での授業後の仲森先生には、そうしたことを伝えたかったのです。

左 みずの・よしちか 広島県立大柿高
校、呉三津田高校、呉宮原高校などを
経て、竹原高校、呉三津田高校で校長
を務める。2007年度より現職。

撮影◎安田女子中学・高校にて

右 なかもり・ともひで 地理歴史科。
初任以来、中央大学高校に勤務。2学
年主任。



任の年には、水野先生が教頭を
務められていた学校を訪ねまし
た。卒業式の前日、3年生の全
クラスを回って黙々と花を生け
る先生の姿を見て、私は「生徒
のために」という言葉の意味を
深く考えることが出来ました。

自分の感性を磨くことがこれか
らますます必要です」という一
文を目にした時は、私の仕事は
人間を育てることなのだと思
て教えられた気がしました。

私にとっての水野先生がそう
だったように、私は、泥臭さを
意図的に生徒にぶつける情熱と
知恵を持った教師、生徒が自分
の人生を振り返った時に思い出
される教師になりたいと思いま

す。功利的な考えに傾きがちな
社会風潮の中、高校3年間の成
果だけにとらわれることなく、
10年後、20年後に表れるかもし
れない気付きを信じて種をま
き、辛抱強く見守るためには、
私自身にこの社会をどう生きる
かという信念、哲学が必要です。
そう思うと、私たち教師には、
「これで一人前」というゴール
はないような気がします。私は、

東京でも尊敬する先生に出会い
ましたが、その方も「人として
心を磨くこと」を真摯に、誠実
に続けていらっしやいます。
それにしても、恩師の方々は
若き頃、やはり今の私と同じよ
うに悩みや不安を抱えていたの
でしょうか。水野先生はじめ先
輩方の歴史と向き合いながら、
これからも授業力と人間力を高
めていきたいと思っています。

教師の言葉が生徒の心に残
るのは、教師が、他の人とは
違った見方を、自身の体験を
踏まえて語った時です。その
ため、教師には哲学を語り、
社会を見通し、芸術を愛する
教養が必要です。絵が描けな
くは駄目だということでは
なく、芸術への興味を生徒の
中に喚起できる教師でなけれ
ばいけないということです。
グローバル化が進む中、周
囲に翻弄されることなく、プ
ライドを持った人間として存
在するためには、文化が必要
だと言われます。では、私た
ち教師は、生徒の内面に文化
を根付かせるだけの教養を備
えているのでしょうか。社会
が大きく変わる今だからこ
そ、教師は「これで十分」と
思うことなく、学び続けなけ
ればならないと思います。
仲森先生ともよく話すので
すが、教育の本質は生徒のや
る気に火をつけることです。
それが出来れば、生徒は自ら
学びます。そのためには、生
徒たちが涙を流し、大笑いし、
時に怒りの表情を浮かべるよ
うな授業をし、生徒と共にど
う生きるかを考えることが必
要です。仲森先生も私も、ま
だまだ教師としての学びは続
いていきます。